

外国語活動・英語部会

部会長：附属中学校 林多恵子
部会員：附属小学校 下脇陽子 濱雪乃
附属中学校 加藤理嘉・西平美保・林多恵子
附属高等学校 金子麻子・平田智子・村田文

2024 年度活動報告：

1. 2024 年度の研究目標

今年度は、多言語教育に関心のある教員や、これまでに実践を行ってきた教員がいるため、英語教育に留まらず、様々な言語の特性を指導に取り入れ、日本語や英語との比較をしながら言語習得を促すことで児童・生徒により広い視点や気付きを持たせることができるような言語教育、指導の研究を行うことを目標とする。

また、共通テーマである「お茶大コンピテンシー等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した研究開発」を受け、外国語活動・英語部会が継続して連携研究のテーマとして掲げている「12 年間の発達を踏まえた研究」を意識した授業実践を行い、とりわけ各校間における接続期の指導を円滑に行うための方法を研究する。

2. 年間計画

外国語活動・英語部会は、以下の年間活動計画の下部会を行った。

2024年度 連携研日程 外国語・英語部会						
月	日	曜日	活動内容	司会進行 企画（含：発表）	記録	
4月	16	火	★全体会 *第1回部会 昨年度の活動について/今年度の活動内容の確認と分担等			
5月	7	火	*第2回部会 共通テーマに関する検討	司会・進行 部長	高校	
6月	4	火	★附属校園人権研修			
7月	2	火	*第3回部会 グローバル交流授業についての実践報告	中学校	小学校	
9月	3	火	*第4回部会 お茶大コンピテンシー「創造的思考力」に焦点を当てた授業の実践報告	高校	中学校	
10月	1	火	*研究倫理・情報セキュリティ研修			
11月	5	火	*第5回部会 教科横断的な学び STEAM×英語	高校	中学校	
12月	3	火	★各校園の研究共有会（1校園15分程度）			
1月	14	火	*第6回部会 実践報告「外国人観光客と英語で話してみよう！」	中学校	小学校	
3月	4	火	*第7回部会 デュッセルドルフ日本人学校とのオンライン・手紙交流 世界とつながる「ことば」の学び ・1年間のまとめ	小学校・まとめ	高校	

3. 活動内容

(1) 5月7日：共通テーマに関する検討

共通テーマ「お茶大コンピテンシー（批判的思考力、協働性、創造的思考力、問題解決力、他者理解力、対人葛藤解決力、省察的思考力、自己制御力、内的統制感、エージェンシー）等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した研究開発」について、校種ごとの捉え方や取り組みの現状について共有をすることから始めた。

- ・小学校：研究開発5年目である。協働性、エージェンシーを中心に他教科においてもこれらのスキルの育成に取り組んでいる。
- ・中学校：研究課題である「創造的思考力の育成」に継続して取り組んでいる。
- ・高校：SSH校のⅡ期指定を受けた。「教科のSSH化」の一環で、科学的思考力、批判的思考力などを取り上げている。

意見交換をする中で、Lingua Franca としての英語を知ることや、スタンダードから外れた英語を楽しめることの大切さ、批判的思考力を養うために多言語を学ばせることの良さといった外国語教育に対する新たな視点の必要性について共有することができた。同時に、俯瞰して外国語を捉える視点の欠如などが課題として挙げた。また、言語が異なることによって思考パターンが変化する点に着目し、論述やアプローチの仕方が変わることが、批判的思考力や他者理解力を育てることに寄与するのではないかという意見もあった。

(2) 7月2日：グローバル交流授業についての実践報告

附属中学校は2024年度、公益財団法人博報堂教育財団による日本語交流プログラム実施校として採択され、海外で日本語を学ぶ生徒との交流活動を行った。このプログラムの本来の目的は、日本語で交流を図ることではあるが、留学生の日本語レベルが多様であったため、生徒は英語を用いて交流を図ろうとする場面が多く見られた。留学生は各クラスに約2名ずつ配置され、いくつかの教科の授業にも参加した。部会では、英語の授業（特別授業）の様子を発表した。

中学3年生の英語では、Ella Frances Sanders による“LOST IN TRANSLATION”『翻訳できない世界のことば』を用いて、各国の文化を象徴するような特徴的な言葉についての紹介を行った。附属中学生は、留学生にお土産として持って帰ってほしい言葉をグループごと（4名）に考え、「内職」「青春」「ドンマイ」「よいしょ」「お裾分け」などの日本語を選び、英語で説明をした。モンゴル、ルーマニアの留学生グループもそれぞれの国の特別な言葉やユニークな表現を紹介し、附属中学生と一緒に発音をしたり表現を書き写したりした。

中学1年生の英語の授業では、ブラジルからの留学生と盆踊り（炭坑節）を楽しんだ。簡単な日本語と英語での説明の後、一緒に踊る活動を行ったが、中学生の中には、これまでに盆踊りを踊ったことのない子どもたちも多くいた様子であった。

今回の日本語交流プログラムでは、「簡単な日本語で伝える」という活動を行ったが、英語を指導する上での視点としては、この経験が、生徒たちが英語で作文をする中でも生きてくるのではないかという気付きもあった。

(3) 9月3日：お茶大コンピテンシーの中の「創造的思考力」に焦点を当てた実践

附属高校3年生の英語コミュニケーションⅢにおける「創造的思考力」を育む授業の実践報告を行った。お茶大コンピテンシーの中の「創造的思考力」に焦点をあて、起業家であり実業家である Tina Seelig の問いである、“What would you do to earn money if all you had was five dollars and two hours?” について考えさせたり、9つの dots を4本の戦でつなぐ方法を考えることを通して、think outside the box を体験させたりすることで、枠の中だけでなく、外に出て考える大切さを体感する授業を行った。その後、生徒は自分たちの創造性を発揮させ、それぞれのグループで事業や商品（駅に設置するシャワールーム、信号が変わるタイミングがわかるアプリ等）を考案し、プレゼンテーションに取り組んだ。グループ活動では、協働性を意識させたり、過去の entrepreneur を取り上げて、問題解決のヒントを得られるような工夫を行った。また、教員から Best Presentation Award が贈られることや、Acceptance Speech をすることも、生徒のモチベーションを高めることにつながった。

部会の後半には、11月の後半に外国語・英語部会の教員が訪問予定である慶応志木高校の多言語授業について話題になった。

(4) 11月5日：教科横断的な学び STEAM×英語

3年生希望者を対象に、チョコレートコーティングの実験（化学分野 chemistry）と、マシュマロチャレンジ（建築分野 engineering）に取り組ませた。理学部の先生に助言してもらうことで、教科横断的な学びが実現した。

同じような「理科×英語」の取り組みを、全員参加の1年生の授業でも行った。炭酸の中にレーズンを入れてみる実験を行うと、実験物が主語なので受動態が多用される様子が見られた。先生の質問（英語）に対しては、生徒は、英語で答えても日本語で答えても良いこととした。授業後のアンケートは、おおむね良い反応であり、6～7割が学びに対して肯定的であった。授業者として振り返り、このような授業では、Steam 分野に時間する知識、指導プラン準備、教員の研修が必要であると結論付けられた。

教科横断的な学びについては、この他にもカナダのキュレーターの資格取得者であるネイティヴの先生に講師として来てもらい、国際交流プラザのデザイン（芸術分分野 art）についての授業を行った。芸術を鑑賞する際に使用する語や表現、critical thinking についても取り入れることができた。

(5) 1月14日：授業実践「外国人観光客と英語で話してみよう！」

中学1年生を対象とした授業の実践報告を行った。テーマを設定した背景には、現在過去最高の来日観光客数を更新していること、東京にも外国人観光客が溢れていることがあり、こわがらずに、身振り手振りを駆使しながら話してみよう！という目標の下、実践的な活動を行うに至った。

まずは教師が浅草に出向き実際に活動を行い、生徒たちに写真で報告をした。それまで活動に対して不安に感じていた生徒たちも、やってみたいという気持ちになった様子である。活動を行うにあたっては、生徒に注意事項をよく話し、保護者への協力依頼と説明をした。

〈主な注意事項〉個人情報を明かし過ぎない、写真は撮ってよいが撮られないようにする、敬意と丁寧さ、特定の店や人の多すぎる駅なども避けるなど。

また、セリフ集をヒントとして示したり、事前に様々な来日観光客が日本を楽しむ様子や小学生がインタビューする様子のビデオを観せたりすることにより、初めて取り組む生徒たちの気持ちのハードルを下げるための工夫をした。実践後は、報告のスライドを作成させ、白地図（どこから来た観光客かを示す）、一緒に撮った写真、summaryとしてインタビュー内容を三人称を使って英語で表現することをしてもらった。

活動を終えたあとのアンケートでは、緊張したが、やってみたら楽しくなってきた／初めの喋りかけは怖いけど意外とできた／断られて心が折れた／mangaをモンガと言われてわからなかった／もっと頑張らなきゃという気持ちになったなどの記述が見られた。

今回の取り組みについて、部会の教員からは、「先生が実際にインタビューされたのが子どもたちのモチベーションになっているのが面白い。大きなモチベーションにつながったのだろう。」「断られてもめげずに続け、1組にとどまらずに何組にも話しかけたという現象が興味深い（指示としては「1組以上」）。」「3年生まで継続すると表現も増えてコミュニケーションが豊かになるだろうが、使える表現が少ないこの時期に行ったことにも意義があるのではないか。いろいろな英語があることにも気がつけたというのも大きい。」などの感想が述べられた。

（6）3月4日：発表①デュッセルドルフ日本人学校とのオンライン・手紙交流

発表②世界とつながる「ことば」の学び

①デュッセルドルフ日本人学校とのオンライン・手紙交流

小学校国語科の教員による発表が行われた。この取り組みは、国語科の「お気に入りの場所を教える」という単元につながっている。デュッセルドルフ日本人学校の児童とは、お手紙で交流を行った。附属小学校の児童が、質問を手紙に書き、ドイツに送った。オンラインによる交流も行い、1～10までの数字をドイツ語で教わったり、日本からは盆踊り、ドイツからはチキダンスを教え合ったり、歌のプレゼントや詩のプレゼントをしあうことで交流を深めた。オンライン交流の時間は、ドイツの学校は夜8時、附属小では1時間目にあたり、リアルタイムでのやりとりが実現した。この機会により、児童はドイツに興味を持ち、調べ学習につなげることができた。

児童の振り返りでは、「時差を実感した」「ドイツに行ってみたい」「マルチン祭楽しかった」など相手がある交流が楽しかったという記述が見られた。

②世界とつながる「ことば」の学び（3年次）

授業を行うにあたり、「グローバルシチズンとして、グローバルな視点を持つ児童を育てていきたい」「できるだけリアルな体験から学ばせたい、価値観が広がる学びにしたい」という指導目標を設定した。今年度の実践は、「留学生との関わり」と「外国語に関する個別アプローチ」である。

留学生（大学生）との交流授業では、留学生は日本語、附属小学生は挨拶や自己紹介を留学生の母国語で話をしてみることに挑戦した。小学生は、日本文化（例 てまり、南京玉すだれ）の紹介もした。さらに、「世界の課題について考えるーミニ国際会議ー」も行った。

外国語に関する個別アプローチでは、個々に外国語について調べたり、まとめたり、実践したりすることを行った。この時間を、My Language Time とし、それぞれが言語をテーマとした活動に取り組んだ。活動を始めるにあたり、教師から様々な言語があることを紹介し、計画表を立てさせた。途中で挫折したり、言語を変更したり試行錯誤する姿も見られた様子であった。

- テーマ例
- ・新幹線の車内放送（英語）を改良したい！
 - ・学名から学ぶラテン語
 - ・スラヴ語諸派を調べ、共通点を探す
 - ・消滅言語について
 - ・ドイツ語と英語の違い（ドイツにいるいところを驚かせたい！）
 - ・はだしのゲンの英訳 効果音を英語で表すことの難しさを学んでいた
 - ・Harry Potter のセリフを言えるようになりたい！

翻訳機を使って英訳をする児童も見られ、さらにそれを日本語にして内容を確認する姿も観察された。翻訳するとニュアンスが変わることに気づいて、そこから辞書を引いてみるようになったという成長も感じられた。

My Language Time の取り組みについては、中学校、高校の教員から「連携教育」の視点で感想が述べられた。特に、中学校では自主研究という授業があり、高校ではSSHとしての取り組みがあり、生徒たちは自分が設定したテーマについて追究をしていく機会が与えられる。小学校でのこのような取り組みが、中学校や高校における自主的な学びや研究活動につながっていくことを実感することができた。

4. まとめ、今後の活動に向けて

それぞれの学校において、今年度の研究目標を十分に意識した授業実践、取り組みを行うことができた。とりわけ、お茶大コンピテンシー等の育成に関しては、批判的思考力、協働性、創造的思考力、問題解決力、省察的思考力において外国語の授業を通して育て得ること

を示唆できたように感じる。今後、更なる授業研究を行い、その可能性について示していきたい。

小中高間の連携研究においては、「12年間の発達を踏まえた研究」について、特に接続期に有効な指導法、教材について、相互の実践から可能性や課題を見出すことができた。これについては、各学校の実践内容を踏まえて、意見を交わし合うことで共通する部分や発達段階によって異なる部分に気付いたり、指導の難しさを実感、共感したりすることから見えてきたものがある。引き続き、連携研究会の機会を活用し、校種間の意見交流を深めていきたい。

今年度は、英語を越えた多言語教育についてもテーマとして活動を行った。小学校では、英語や英語圏の文化に偏ることなく、グローバルな視点から様々な国の文化や言語を学ぶことができる授業を実践している。中学校や高校においても、英語に留まらず様々な国や地域の文化に触れる機会を取り入れているが、それに加えて英語の文法項目の定着やより実践的に言語活用、運用能力の育成が求められる。外国語教育に対して、スタンダードから外れた英語を楽しむことの大切さ、批判的思考力を養うために多言語を学ばせることの良さといった新たな視点を持ち続け実践することの必要性和、基本的な学習事項の定着については、両者のバランスを取りつつより良い外国語教育を目指していくことが今後の課題である。